都道府県別賞一等

「結の心」と生命保険

岐阜県　多治見市立笠原小中学校　一学年　水野　茜

昨年の夏休み、家族と白川郷に行きました。初めて見る合掌造りの家々は堂々としていて思っていたより大きく、特に大きな屋根が印象的でした。

屋根が草のようなものでできていたので何でできているのか母に聞いてみると、「茅葺き屋根」というものだと教えてくれました。茅葺き屋根はススキやヨシなどの植物を積み重ねて作られている日本古来の伝統的な屋根で、植物を約八十センチメートルの厚さに積み重ねることで冬の豪雪から人々を守ってきました。

私が見学させていただいた合掌造りの家は、約百五十年から二百年以上前、江戸時代後期に建てられた立派な家屋でした。白川郷の建物は一番古いものだと築三百年にもなるそうです。植物でできた屋根がそんなに昔から壊れていないことが不思議でした。

調べてみたら二、三十年に一度丸ごと新しく葺き替えをしていることがわかりました。茅葺き屋根を守るために、今でも白川郷では村中の人々が集まって一軒の家の屋根の葺き替えをするそうです。数十人から数百人もの人が集まり、一日から数日で一気に屋根を葺き替える伝統が残っています。

自分の家の屋根を葺き替えてもらったら代わりにほかの家の屋根の葺き替えを手伝う、この助け合いの仕組みを「結」といいます。結という言葉には人と人を結ぶ、お互いの力を結集するという意味があるそうです。結の歴史は古く、江戸時代にはすでに始まっていたといわれています。冬は豪雪という厳しい自然下で生きていくには個々の家の助け合いが必要でした。〝困った時はお互い様〟という相互扶助の精神をもって暮らしていたのです。

これを知ったときに私は生命保険の仕組みによく似ていると思いました。なぜならどちらも〝お互い様〟の精神で成り立っているからです。

今は元気でも私たちはいつ病気やケガをするかわかりません。突然の病気やケガで多額の治療費や入院費がかかることがあるかもしれません。生命保険はそんな「もしも」のときに備えるものです。毎月少しずつ保険料を払っておくことで、保険金や給付金で、治療費などをまかなうことができます。また、今元気な私たちが毎月支払う保険料は、どこかで困っている人の治療費や入院費になっています。この助け合いの精神は白川郷で行われている結と似ているところがあると思います。結は「労働力や時間」の助け合い、生命保険は「お金」の

助け合いです。生命保険は顔も知らない誰かを助けることができる新しい結の形です。みんなが少しずつ労働力やお金を出し合うことで大きな力になり、大きなピンチを救うことができるのです。

このような助け合いの制度「生命保険」があることで、私たちは安心して生活を送ることができます。

「いつ自分の番が来ても大丈夫なように、普段から順番にみんなで支え合う」これは結の心と同じです。白川郷の大きな茅葺き屋根が豪雪から人々を守ってきたように、生命保険は突然の病気やケガに対する私たちの不安を軽くしてくれる存在です。

白川郷の茅葺き屋根が二百年、三百年と守られてきたように、私たちの安心も生命保険の存在によって長く続いていくと思います。時代が変わっていっても人を思いやったり、助け合う結の精神をつないでいき、大切にしたいです。